中学校三年の部　第三席

対象作品／梶井基次郎著
『檸檬』新潮文庫

梶井基次郎『檸檬』を読んで

弘前市立津軽中学校　柴田美月

私はこの作品が好きです。その理由の一つは、鮮やかで繊細である、と思うからです。作品に、物名や色の名前がたくさん登場します。たとえば、「赤や黄のオードコロンやオードキニン。洒落た切子細工や典雅なロココ趣味の浮模様を持った琥珀色や翡翠色の香水壜。煙管、小刀、石鹸、煙草。」この三文の中だけで赤色、黄色、琥珀色、翡翠色という四つの色が出てくるのが分かります。これらの色の名前が物語に鮮やかさを演出していると私は思います。

そして注目すべきは、この直後に書かれている「しかしここももうその頃の私にとっては重くるしい場所に過ぎなかった。」という一文です。この一文によって、先ほどの色はより濃く鮮やかに、しかも邪魔なくらい派手な重苦しいものになると私は思います。

けれども、それと同時にこの色は「私」が好きである「見すぼらしくて美しいもの」の陰に隠されてしまい、鮮やかではあるもののまるで上からカバーをかけてしまうようにそれは背景に隠れてしまうのです。それは、美しいものもやがては色褪せていく、嫌われていってしまう。そのような比喩なのではと私は考えました。

また、「私」は肺を病むと同時に心も病み始めているのではと読んでいてそう感じました。きれいなものではなく、少し薄汚いものに惹かれていったり、美しいと思っていたものが嫌いになってしまったりと、焦燥や嫌悪という言葉も出てきますが、体力や精神の衰えもあいまって、「私」は物事をややひねくれて受け取っているようにも私は感じました。やるせないというか、憂鬱というか、どんよりとした雰囲気から表題ともなっている「檸檬」、レモンの存在によって話の内容が変わるのも、この作品が好きな、もう一つの理由なのかもしれません。

まるで真っ黒い墨汁の中に鮮やかで美しい色の絵の具を一滴、また一滴と垂らし続けたようにそのレモンの存在で物語の雰囲気が徐々に軽く、また、明るいものになっていきます。物語の雰囲気というよりは「私」の心がレモンのおかげで軽くなったのではと思いました。

これらのように、ミステリアスな雰囲気と鮮やかさ、繊細な美しさを持つ流麗な文が、この作者の、梶井基次郎の特徴でもあり、私がこの作

品が好きな一番の理由です。物語の色や風景が気づかぬ内にコロッと、色鮮やかに変わる万華鏡のように。ほんのちょっとの小さな時間を、一つだけそっと切り取って置いたような、なんとも言えない不思議な印象を何度も何度も受けました。暗いけれども、まるで何枚かの写真をレモンティーを飲みながら優雅に眺めているような、本当に綺麗で素敵な作品だと感じました。

何かに追われて落ちつきたいときや、何かに躓いているときなどに読むと、非常に良い作品だと思います。

文学作品は難しくて読みたくない人もいると思いますが、この『檸檬』は文学作品としては分量が少なく、あっさり読めて読後感も爽やかですし、今では電子でも読めるようになってますのでまだ読んだ事のない人は是非読んでみて下さい。心の中のモヤモヤが晴れる作品だと私は思います。